

●取扱説明・解説書

この度は、ルミナスタジオとまほー工房の合作音声作品コンテンツ、
『輝鳴紅葉のスピリチュアルファクター02 ~魔法使い入門 番外編』をご視聴頂き、誠にありがとうございます。

本品は『檣崎留美のルミナスダイアリーシリーズ』に登場する輝鳴紅葉と、まほー工房ならではの魔法のメソッドにルミナスタジオ独自のテイストとアレンジを施し、魔法にスピリチュアリズムの要素を掛け合わせた魔道書音源となっております。。

この文書では、本品のトレーニング項目についての解説を行わせていただきます。

●同梱物・仕様

- ◆『輝鳴紅葉のスピリチュアルファクター02』本体
【/spiritual_factor02/mp3/】
- ◆サムネイル登録用画像
【/spiritual_factor02/img/】
- ◆取扱説明書(このPDFファイルです)

◎音楽データ仕様

圧縮方式：MP3(MPEG Audio Layer-3)方式
ビットレート：320kbps
サンプルレート：44,100Hz
総MP3ファイル数：3
制作ソフトウェア：Apple Logic Pro X

●注意・推奨事項

- ◆本作品は魔法指南のボイス作品で、催眠音源ではありません。
- ◆本作品の効果は個人の資質・形質に左右される部分がありますが
アニメや漫画、ゲームなどが好きでイメージ力がある方のほうが
習得が早いかもしれません。
- ◆気分が悪い時や体調のすぐれない時の視聴はご遠慮ください。
- ◆運転や機械の操作時など、事故につながりかねない状況での視聴は
絶対にしないで下さい。
- ◆本作は特殊な音声加工はしていないため、どなたでも
聞ける内容ですが、それでも精神的に不安を感じてしまう方や
心臓、脳、肺などに不安があり心配をされる方は
視聴を控えるようお願い致します。



●作品補足

ここからは本作の流れ、およびトレーニング内容の補足事項や、そのほかにも本作を知るための様々な情報をキャラクターの解説にてご紹介していきます。

◆作品の流れと解説

(1)リラックス

前回の内容のリマインドだ。

何事もリラックスは必要なものだろうけど、短時間で思考と意識のウォームアップをするのは意外に難易度が高めなのが、実際にやってみると分かるはずだ。

最も効率の良いリラックスってのは人それぞれだから必ずしも同じとは限らないが、基本的には『自分の頭の中に巡っている様々な思考』を一時停止して、今の状態にフォーカスをしていくと良いかもしれないな。

(2)サイコフィールドの展開

スムーズにトレーニングが進むよう、予め前作で会得したであろうサイコフィールドを展開する。前作中に教えた通り、自分の力の発揮しやすい場所を定義することで、スピリチュアルファクターの運用を容易にしていくことができる。

フィールドが有ると無いとでは、この先の効果の実感の差が劇的に変化する。事前準備を怠らぬようにしよう。

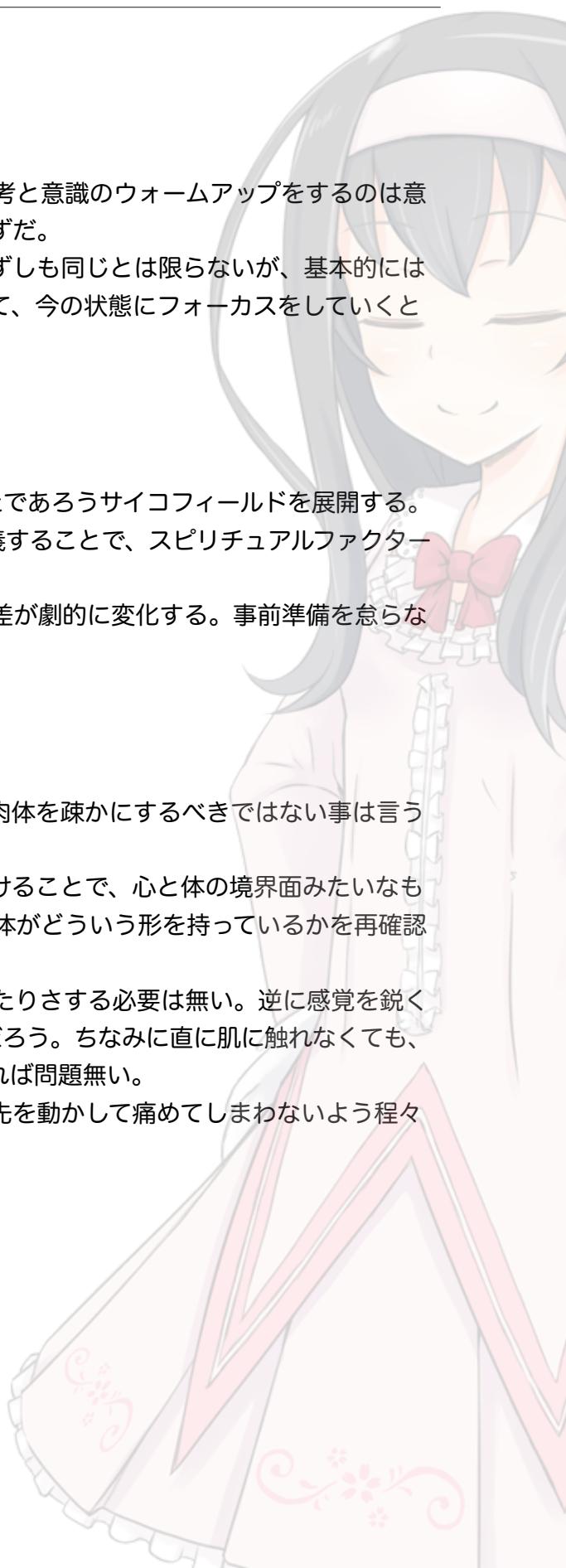
(3)体の感覚を明確にする

スピリチュアルの名を冠するからと言って、実際にある肉体を疎かにするべきではない事は言うまでもない。

今回のエナジースキンはフィジカルな方面にも意識を向けることで、心と体の境界面みたいなものを自覚する必要がある。そのためにも、まずは自分の体がどういう形を持っているかを再確認していくのが近道だ。

体を大きく動かすわけじゃないから、そこまで強く叩いたりさする必要は無い。逆に感覚を鋭くするためにも優しく撫るように実施するのがポイントだろう。ちなみに直に肌に触れなくても、衣服越しであっても接触している感覚を得ることができれば問題無い。

手の届きにくい場所は無理してやる必要は無い。変に手先を動かして痛めてしまわないよう程々で構わないのであるからな。



(4)体の表面から滲み出るオーラ

エナジースキンの原型となるオーラのヴェールを作り出す……といっても、そこまでそういった形のようなものを現時点では意識する必要は無い。

全身からオーラを吹き出るイメージとは言うけど、もっとわかりやすく例えれば発汗しているようなイメージでも十分だと思う。本編中でも取り上げていたけど、前項で意識した体の表面が広がっていくイメージを持っていくのも良いだろう。

最終的に、体全体に何かが纏わり付いているようなイメージを持つことができれば、次のトレーニングで結構楽にイメージを続けることができるんじゃないかな。

(5)体表を覆うオーラの圧縮

前項で纏ったオーラの密度を上げて体の表面に張り付かせていく。そのテの人たちには興奮するかもしれないけど、最終的にはラテックスが凝固してゴム膜のように伸縮性のある状態のものになっていくようなイメージだ。

ラバースーツ状の状態と言うのが近いけど、そこまで体を縛り付けるような硬さをイメージしないほうが良いだろう。この後実施する手順で、場合によっては体を動かしにくくなってしまう可能性もあるからな。

自分のリアルの体よりも若干意識できる領域が拡がっているようなイメージ……と例えるのは難しいか。画像編集をやった事のある人なら、今の自分自身のサイズを101%にしているような感覚にして、その差分を感じてみるとどうだろうか。

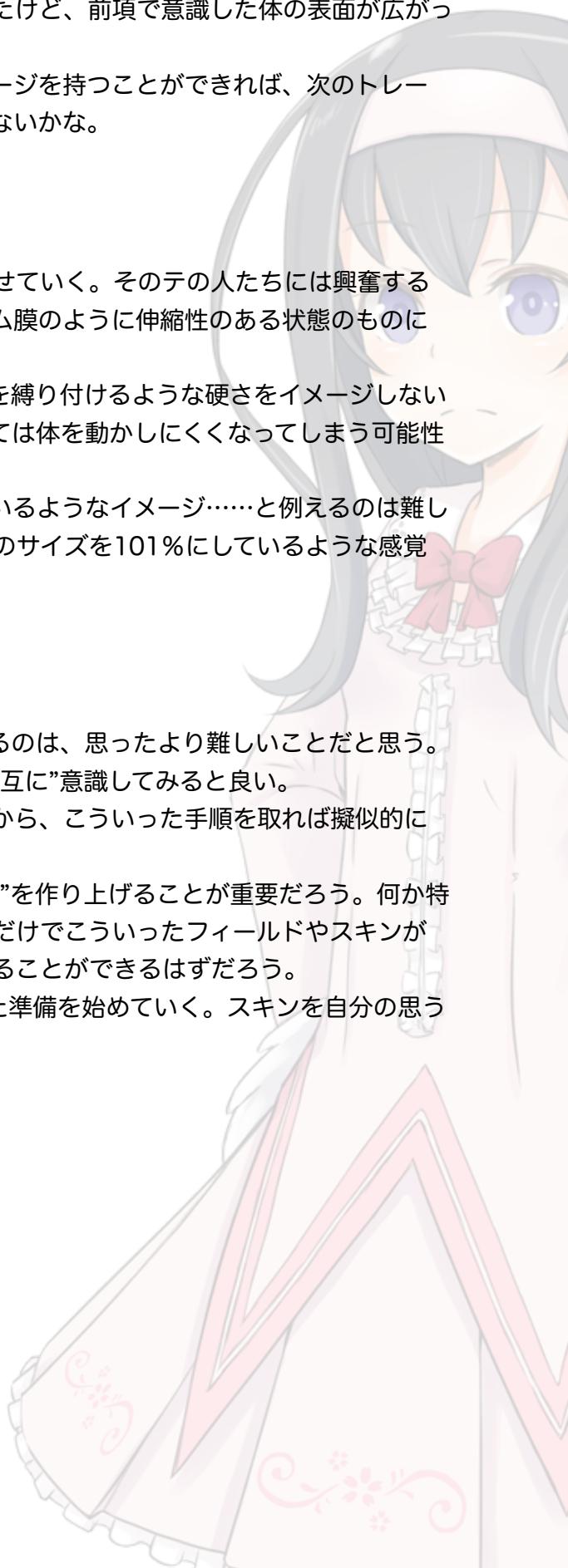
(6)スキンとフィールドの同時意識

前項の内容を実施しながらフィールドの意識をやってみるのは、思ったより難しいことだと思う。もし難易度が高いと感じたら、スキンとフィールドを”交互に”意識してみると良い。

人はどうしても同時に実行できるタスクには限界があるから、こういった手順を取れば擬似的に同時意識という事ができるはずだ。

最終的には、この双方を意識せずとも存在している”認識”を作り上げることが重要だろう。何か特別な手順を踏む必要もなく、『そこにある』という認識だけでこういったフィールドやスキンが機能させることができれば、この技法を最大限に活用することができるはずだろう。

そこで、次項では”スキンの”オートメーション化に向けた準備を始めていく。スキンを自分の思うままにコントロールできるようにしていくんだ。



(7)スキンの流動性を認識する

スキンを上手くコントロールするために、そのエネルギー膜の表面の対流を行わせる。自分の体表を地球の大地に例えるなら、スキンのエネルギー膜はまさに地球の大気と考えれば、その対流のイメージは容易になるだろう。

このトレーニングは、エネルギーを対流させることによって感覚の変化を感じることによるスキンとの同調を促進するものになっている。どういった方向へ対流させると、自分にとって気持ち良く感じるかを探って、上手くスキンのエネルギー膜を操るようにしていくのがポイントだ。

このトレーニングに慣れてくると、意図的に特定箇所のエネルギー膜の厚みを増やして、本編冒頭にも説明したようなゴム手袋のような状態を作り上げることも可能になる。

人によっては、戦うための技術に転用することもできるかもしれない。スキンが自分の身体機能を強化させるような某の機能を付け加えれば、走るスピードを向上させたり格闘技における技の威力を向上できるかもしれない。そういう効果を与るために、最後のプロセスが役に立つはずだ。

(8)スキンのオートメーション化・体との融合

スキンを自動的に機能させることができると、特別意識を向けるようなぎこちない仕草をしなくても、勝手に自分の心身を守ってくれるようになる。まさに第二の皮膚となるわけだ。

この時、ただのエネルギー膜として意識するだけでなく、別の材質のものを意識してみるのが良いかもしれない。俺のスキンがシャボン膜で出来ているみたいにって事だ。

ただ最終的に物質次元での肉体と密接な繋がりを持たせる事になるから、その材質は自分の持つ性格や好みに合ったものを選ぶ必要がある。好ましくないものをイメージしてそれを体表に融合させて気分の良い奴なんて居ないだろうしな。

オートメーション化を完了させた後でも、意図的にスキンを意識する機会は結構あったりする。前項のスキンの対流を応用して特定部位のエネルギー膜の厚みを増やしたりするのがそれに相当して、この体と融合させるトレーニングは無防備な箇所を無くすことを念頭に置いているものになっている。

つまり、最小限の防護を確保し続けるためのトレーニングなわけだな。特定部位にエネルギーを注いだ結果、それ以外の部位が無防備になってしまっては意味が無いし、弱点が出来上がってしまうのは論外だ。

自分の心と体を守る大事な要素だから、自律動作ができるようになった後でも要所で意識をするようにしておくと、スキンのメンテナンスのような役割を果たして、極まれば『ある』と意識するだけで、最高のスキンが自分を優しくかつ手厚く守ってくれることだろう。

●クレジット

◇原作・基本作品構想



制作：ルミナスタジオ(Luminous=studio)

<https://www.youtube.com/channel/UCYpu7V31Si5rHUFkS9aNPPpw>

◇企画・サウンドデザイン・文書作成

Breakthrough_ace.輝鳴 (ルミナスタジオ)

<http://terunari.info>

◇ボイスアクリター（輝鳴紅葉）

桜月秋姫

<http://crecentmoongardens.blog.fc2.com>

◇脚本・スクリプト・制作マネージメント

Windress (まほー工房)

<http://mahoukoubou.jimdo.com/>

(c)2015 Mystiska Lab All rights reserved.

Illustrated by Soranon

Photographed by Luminous=studio.